



かどや通信

第17号

発行日：平成28年11月

発行行：かどや保存会

発行責任者：清水 久行／編集：廣野 克子

早くも

来館者二万人突破！

鳥羽大庄屋かどやの来館者が、十一月五日に二万人を突破した。

二人目のお客様は、名古屋から来られた学生時代からの仲好し二人連れ。前日に泊まったホテルに置かれていた「楽市」のパンフレットに魅かれて鳥羽を散策していて、かどやに立ち寄ったのだそうだ。

清水館長から、記念品としてかどやのTシャツや絵葉書などかどやゆかりの品々をはじめ、魚寅特製かきのオイル漬けや鳥羽の名菓シエルレーなどが贈呈された。

二人は、突然の二万人コールに「びっくりしました！十年分の運を使ってしまったみたい」とひどく



驚かれた様子だったが、その後館内を解説付きでじっくり見学された。かどやは平成二十五年五月一日から公開が

始まり、平成二十七年五月二日に来館者一万人を達成。その後も順調に来館者は増え、夏前の予想では二万人目は来年早々かと思われていた。

ところが、九月の「着物リメイク展」が新聞で紹介されるや手芸好きの女性グループ等が連日見学に訪れるようになり、来館者数が急激にアップ。さらに十月の書道展でも出展者の幅広いネットワークで着実に来館者が続き、十月最終週からXデーに向けてのカウンドダウンが始まった。想定外の速さに戸惑いながら準備を進めていたところ、なんとなかまちマーケット当日に記録達成となったのである。「これは、一万人目よりなんと五ヶ月も早い快挙であった。」

清水館長は「こんなに早く二万人目の来館者を迎えることができ、かどやを訪れてくださったすべての皆さまに感謝です。かどやの建物の魅力に加え、展示や行事内容の元気さや、管理・清掃等の地道な努力が評価していただけたものと思います。今後とも建物の良さを活かしつつ、楽しさを味わっていただけるよう心がけてまいりますので、引き続きご支援をよろしく願います」と喜びを語ってくれた。

祝！二万人！こぼれ話①

芋と館長

十一月五日は、なかまちマーケットに加えて、城山界隈では楽市が開かれスタンプラリーも行われており、かどやもスタンプ拠点になっていた。さらに、午後には屋下がりコンサートも開催されるため、朝からスタンプを増員し、臨戦体制を敷いていた。

二万人達成は午後の早い時間が有力だったが、午前中から普段より来館者が多く、館内説明とスタンプラリーの対応でスタンプは大汗をかいていた。こんな時、受付辺りでデーんと来館者をさばいてくれるのが清水館長なのだが、十一時過ぎに「達成は風からやろで、芋掘りに行ってくる」と言い残して姿を消してしまった。「ええっ！この忙しいのに芋掘り？」と残されたスタッフ一同倒れそうになったが、時すでに遅し。館長は赤崎あぐりパークの一面に植えたさつま芋の収穫に行ってしまったのである。

正午前後に一瞬客足が途絶えたこともあり、二万人セシモニーには館長も間に合い記念撮影。館長の芋はコンサートの入場者に振る舞われ、めでたし、めでたしとなった。

古典へのいざない

古典と言っても、様々なジャンルがあるが、かどやでは古典落語に百人一首・源氏物語と古典芸能・古典文学など「古典」に触れるイベントが立て続けに開催された。

《粋な笑いの親子寄席》

「第一回かどや寄席 切磋亭琢磨・幸村 親子会」が十月十六日に行われた。



かどやでの寄席は、平成二十六年二月に林家染弥（現・林家菊丸）さんの独演会『わ』楽寄席」（南勢志摩文化創造“わ”の会主催）以来。今回は、自らを社会人落語家と称する元教諭で津市在住の切磋亭琢磨さんと弟子の切磋亭幸村さんが出演した。小学六年生の幸村さんのお題は「初天神」と「時うどん」、琢磨さんは「鹿政談」など二席を滑稽かつ情景豊かに語り、会場には笑いが充滿した。

幸村さんの嘶には子供ながらに上品な色気が漂い、礼

儀正しい所作から生み出される初々しい笑いが観客の心を奪った。



師匠の琢

磨さんは大
学時代に落
語を始め、
教員時代に
も授業に落
語を取り入
れるなど落

語は生活に密着していたが、「落語をもっと上達させたい」と平成十八年に早期退職し、上方落語協会が主催する繁盛亭落語講座を受講。現在は落語と教師時代の経験に基づく講演活動で全国を飛び回っている。そんな琢磨さんの語りには、いぶし銀のような深みと味が溢れ、観客をほのぼのとした笑いの世界にいだなした。

鳥羽で生の落語を聴くチャンスは限られており、特に小学生の落語を聴くのは初めての人が多かった。ワインにたとえれば年代物と新酒を一度に味わったようなもので、観客は新鮮さと熟成された芸のそれぞれの良さに酔いしれた様子で「良かったなあ」「楽しかったわ」とこやかに話していた。

源氏物語を紐解けば

第三十八回かどや塾では「古典文学最初の一步 その一 源氏物語をちよっと紐解く」と題して、かどやの文芸委員・カヨさんが案内役を務めた。五回シリーズの初回にあたる今回は、第一帖の光源氏の母・桐壺更衣について書かれた一節を取り上げた。元教諭のカヨさんは長年培った経験を活かし、一方的な講義ではなく、全員参加の適度な緊張感の中で、雅な王朝絵巻を紐解いていった。難解な部分には分かりやすい解説を補足するなど、細やかな工夫を随所に加えてくれたお陰で、参加者には当時の状況がたやすく理解できたようだった。



最後におはなしライブびっころ所属の岡崎さんが『京ことば源氏物語』（中井和子訳）の一節を朗読してくれたが、勉強の甲斐あって、古の京の都にタイムスリップしたような優雅なひとときだった。（次回は一月十四日）さて、当シリーズのきっかけは、十月から三回シリーズで行っている「百人

一首に親しもう」というかるた取りの練習会だった。かどや恒例のお正月行事「百人一首をとる会」のすそ野を広げるため、正月前から百人一首になじんでもらおうと企画したが、希望者が少なく企画倒れになりそうな時にかかってきた電話から始まったのだ。「和歌の背景などを解説してもらえたら参加したいのですが」。そこで「分かりました！かどやには古典に強い文芸委員がいますので、かるたの前に解説の時間をつくります！」と独断で快諾。その後、恐る恐るカヨさんに告げたところ、「ようがす！」とすんなり引き受けてくれたのである。

そんなこんなで十月十五日のかどや塾では、かるた取りの前にカヨさんが百人一首の一番と二番、九十九番と百番で詠まれた和歌の背景（いずれも親子の天皇の作品で、王朝文化きらびやかな時代と、王朝が衰退しはじめ武家社会に移行する時代に詠まれたもの）を分かりやすく解説。電話の主も大変満足の様子で「古典をもっと知りたくなりました。そういう講座があるといいですね」。その旨をカヨさんに告げると「源氏物語をシリーズで解説するのも面白いかも」となったのだ。

（まずは、文芸委員に感謝！）

書道展に幅広い見学者

十月の展示は、書道展「ミナ書展」鳥羽」と題し、名古屋伏見で書道教室「あーとさろん香」を主宰する大石穂苑(香)さんと生徒の皆さんの作品展だ。「ミナ」とは、今年五月に開催された「伊勢志摩サミット」に就いて名付けられたもので、穂苑さんを含む十七人が出展した。

講師歴三十年の穂苑さんは伊勢市在住だが、鳥羽での作品展は初めて。生徒の皆さんの作品は、今回のために鳥羽に因んだ「海」をテーマにした書き下ろしの力作が並んだ。

穂苑さんは新書派協会に所属し、同会の理事を務めるが、穂苑さんの師匠で同協会の常任理事である太田穂撰さんをはじめ、同協会の創設者・近藤撰南さんや現会長・土井汲泉さんの作品も展示される贅沢な作品展となった。

出展者のほとんどは愛知県在住だが、皆鳥羽まで足を運んでくれたのをはじめ、穂苑さんの幅広いネットワークを駆使し、高校時代の友人にも積極的に声をかけてくれたお陰で連日見学者が続き、来館者一万人の早期達成にも貢献してくれた。

技術が光るミニ着物展

十一月三日からは、甲出明子「ミニ着物作品展」と題し、古布を利用したミニ着物五十点と端切れを使ったタペストリー二点が展示された。

中出さんの自宅のタンスには着なくなった和服が多数眠っていたが、長年和服の仕立てをしていた中出さんは、思い出の残る着物を蘇らせようとミニ着物の制作を始めた。自宅で裁縫教室を開いていたこともある中出さんの技術は折り紙付きで、柄合



わせはもちろん、細部に至るまで配慮のいき届いた丁寧な仕上がりは、「すっぴいなあと見学者のため息を誘った。

作品の材料は、自分の着物はもちろん、お母様から譲られたものや友人が提供してくれた物など様々だが、「これは、母が着ていたものよ」



ど、「一ひつひつに思いのこもる作品ばかり。その気持ちが見る人にも伝わるのか」いつまでも見ていたい」とゆつり時間をかけて鑑賞する方も多かった。

◆ ◆ ◆

出展者の皆さんは、期間中足繁くかどやに通い、見学者に対応してくださるが、ミニ着物展の中出さんは毎回着て気品のある着物姿で出勤し、「着物はやっぱりええなあ」とかどやのスタッフをうっとりさせた。

中出さんは、見学者がいない時は二階の展示机の片隅で黙々と縫物をしていた。背中こしには黒塀のかどやの内蔵が見え、その姿は古き良き時代の日本のお母さんのようだ。二階に座る中出さんの周りには、いつもほのぼのとした「和」の空気が漂っている。

祝！二万人！こぼれ話②

多い日もあれば…

来館者二万人を達成した十一月五日は、なかまちマーケット等もあり、スタッフを増員したところ来館者は四十名を超えた。さらに翌日は、なかまち界隈を中心にしたウォークラリーがあり、約百七十人が申し込んでいるとのこと。かどやもチェックポイントになっているので、この日も休日スタッフを増員し、臨戦態勢で臨んだ。

十時過ぎから親子連れのグループの姿が見え始め、どのグループもかどやの前で立ち止まるのだが、何か中には入ってこない。手持ち無沙汰のスタッフ一同「なんでやる」と首をかじげたが、ラリーは課題をクリアしたら次の場所へ移動し、所要時間も争うので、館内でのんびりする時間はなかったのである。

その結果、六日の来館者はなんと

ゼロ。特別招集されたスタッフ達は閉館時間を待たず、解散となった。

こんな日もあります。



**鈴木知事と鳥羽活性化を語る
鳥羽なかまち会**

鈴木英敬知事が地域で活躍する住民と意見交換する「みえの現場「やっぱし」すこいゃんかトーク」が十月三十日、かどやで行われた。

参加者は鳥羽三丁目 四丁目の活性化に積極的に取り組んでいる鳥羽なかまち会 代表 坂田さや香さんのメンバー八名だ。

トークに先立ち、同地域を知事と共に歩き、空き店舗の活用状況等を紹介した。

なかまち会は、Uターンで地元に戻った坂田さんと遠藤美和さん 同副代表が、かつての活気が失われた



町に、もう一度賑わいを取り戻そうと地元の事業者らに呼び掛けて平成二十六年に発足。地域内の店舗を紹介するマップを作成し、隔月毎になかまちマーケットを開催するなど活性化に努めてきた。さらに今年六月には同会の有志で合同会社 NAKAMACHI 代表 濱口和美さんを立ち上げ、空き店舗活用や移住促進も積極的に推進している。

知事とのトークでは、坂田代表がこれまでの取り組みを紹介し、なかまちの活動によって他の地域でもいろいろな動きが出てきていると話した。メンバーも同会発足によって地域内の連携ができた。観光客にお店を紹介し合ったり、マップで顔を覚えてもらえることで本業にも効果が出ている」と報告した。

同トークは今回で百二十三回目を数えるそうだが、女性陣がリーダーシップを取っていて、知事の横に座るのは今回が初めてとのこと。鈴木知事は女性の活躍にツールを贈ったうえで、なかまちの活動がこの地域に留まらず、鳥羽駅周辺にまで広がり、活気溢れる町になるよう頑張っ

てほしいと結んだ。

◆◆◆ 貸部屋の案内 ◆◆◆
かどやを有効にご活用いただくこと、一部の部屋を貸部屋として貸し出しています。茶話会や勉強会、展示会などにご活用ください。詳細は、かどやへ。
電話〇五九九―二五八六八六

時間区分 部屋	午前	午後	全日	冷暖房設 備利用料
	10時～12時	13時～16時	10時～16時	
座敷南(10畳)	500円	600円	1,000円	500円
座敷北(8畳)	400円	500円	900円	—
仏間(6畳)	300円	400円	700円	—

- ・営利目的の場合は、料金表の10割増しとなります。
- ・鳥羽市民または市内勤務者以外の利用は、料金表の5割増しとなります。
- ・許可された使用時間を超過する場合は、割増料金が発生します。
- ・冷暖房費は、全日使用の場合は2倍になります。

かどや保存会 平成28年度会員募集中!

かどや保存会は、歴史的文化財である「鳥羽大庄屋かどや」の保存ならびに効果的な活用・運営をめざして活動を続けており、当会を支援してくださる会員を募集しています。

お陰さまで27年度には、301名の方々に会員登録いただきましたが、今年度はさらにこの和を広げたいと思います。登録がまだの方は、是非ご支援くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

本年度(H28/4/1～H29/3/31)の年会費(2,000円)は、継続・新規を問わず、以下の方法で納入ください。(1)手渡し：かどやにお越しいただき、直接事務局にお支払いいただく。

(2)銀行振込：郵便局 普通 かどや保存会 00850-4-151751
百五銀行 普通 かどや保存会 801-460713